

木育サミット



あらゆるライフステージを木育で彩る ～暮らしに木を取り入れよう～



第5回



木育サミット 2018

実施報告書

2018.2.24 [土] 10:00～16:45

秩父宮記念市民会館

林野庁補助事業



東京おもちゃ美術館



芸術と遊び創造協会

主催：認定NPO法人芸術と遊び創造協会／東京おもちゃ美術館 共催：秩父地域森林林業活性化協議会 協賛：西武鉄道株式会社、秩父鉄道株式会社、東京木材問屋協同組合、東京銘木協同組合、東京原木協同組合、東京木場製材協同組合 後援：埼玉森林管理事務所、埼玉県、秩父市、横瀬町、皆野町、長瀬町、小鹿野町、秩父広域森林組合、秩父木材協同組合、一般財団法人秩父地域地場産業振興センター、一般財団法人地域活性化センター、公益社団法人埼玉県農林公社、公益財団法人森林文化協会

◆当日の開催プログラム ※当日配布資料より抜粋

- 10:00 開会・オープニングセレモニー**
主催者挨拶: 多田 千尋(東京おもちゃ美術館 館長)
開催地挨拶: 久喜 邦康(秩父市長/秩父地域森林林業活性化協議会会長)
- 10:20 基調報告**
馬場清(芸術と遊び創造協会)
- 10:40 基調講演**
沖修司(林野庁長官)
- 11:00 特別講演:「いのちに寄り添う"まほろば秩父"の森が育むもの」**
園田稔(秩父神社宮司)
- 12:10 来賓紹介**
ウッドスタート宣言自治体首長および企業の紹介
- 12:15 昼食(ウッドスタート自治体&企業 ランチョンサミット)**
- 13:45 分科会**

**ランチョンサミットは
2つの分科会で行います。**

※一般参加者への公開はございません。
話された内容についてはクロージング
トークにて紹介します。

自治体版

ウッドスタート宣言自治体の首長が一堂に会し、「木育第2ステージへ」をテーマに、様々な木育の取組について意見交換を行います。

企業版

「日本の森を元気にするために何ができるのか」。それぞれの企業の強みを生かした、国産材の活用方法について、情報交換いたします。

<p>1 森と都市をつなぐ ～人と森のつながりの「見える化」～</p> <p>安心できる飲料水の提供、二酸化炭素の削減、癒やしの場の提供など、いろんな形で都市住民の暮らしを支えている森。しかしそのつながりは見えにくく、森から得られる恩恵はいつも忘れがちです。そこで、そのつながりを「見える化」して、遠く離れたところにある森に対して、都市住民はどのように関わっていくべきなのか、それをつなぐためにはどうしたらいいのか。そのアイディアに迫ります。</p>	<p>2 乳幼児期を彩る木育おもちゃ ～埼玉からの発信～</p> <p>乳幼児期、ある意味人生の中でもっとも五感を駆使しながら遊ぶこの時期にこそ、木製玩具は必要です。今回は東京おもちゃ美術館ウッドスタート事業の中で、埼玉県内他各自治体において、その地域ならではの誕生祝い品をデザインしているデザイナーに集まっていただき、そのデザインの意図、遊び方、効果、そして木製玩具と木育玩具の違いなどについて、実際におもちゃに触れてもらいながら、考えます。</p>
<p>3 木の良さを伝える 木に関わる仕事をする ～木で育て～</p> <p>木育はあらゆる年代に行われるべきもの。小学校のカリキュラムに木育を取り入れ、ものづくりを学ぶ大学生にも木育を語る。これから木工職人を目指す社会人に木育を伝える。今後、木に関わる仕事をする人たちの増やすためにも、そして多くの人々が木育を意識し、循環型社会を構築するためにも、いろんな場面で木育の重要性を伝えることは必要だと考えます。その取組について紹介します。</p>	<p>4 人生最後のステージを木とともに ～高齢者と木育～</p> <p>木育というどうしても「子どものもの」と思われてしまいがちですが、そんなことはありません。お年寄りにとっての木育もあります。高齢者施設における木質化の意味、認知症のお年寄りにとっての森林体験の重要性、高齢者が使うものを地域材で開発する意義など、高齢者と木の関係を研究し、実践している3人の方々に語っていただきます。</p>

- 16:00 クロージングセレモニー**
水谷伸吉(more trees事務局長)、椎川忍(地域活性化センター 理事長)、一條達雄(一條ランバー株式会社 代表取締役)

16:45 閉会

閉会后、けやきフォーラムにて懇親会を行いますので、是非ご参加ください。※参加費別途

第5回 ◆木育サミット2018 実施報告

2018年2月24日に開催された「第5回木育サミット」。木育の最新情報の発信源であるこの大会は、2013年度の第1回開催から始まり、今年で5回目の開催となった。日本有数の多樹種の森を有する秩父市を舞台とし、暮らしの中に木を取り入れよう運動であるウッドスタートに参画して下さる市町村・企業などを多数迎えての開催となった。当日は400人以上の参加者に来場いただき、全国の木育関係者の有意義な情報交換の場となった。本誌ではその開催内容を報告するとともに、「未来の木育」のために、一人でも多くの方がさらなる興味を抱いてくれることを願っている。



◆基調報告：木育のこれまでとこれから～秩父のサミットで考えたいこと～ (東京おもちゃ美術館副館長 馬場清)

【第1期 黎明期(2004年～2009年)の特徴と課題】

- 2004年北海道庁水産林務部木材振興課が「木育推進プロジェクト会議」をスタート。木育という概念が誕生。
- 2006年「森林・林業基本計画」の中で木育が位置づけられる。
- 2007年木育推進体制整備総合委員会を中心に広めていくという気運が高まる
- 木材需要拡大に留まらず、「豊かな心や感性」「共感する心」「人と自然の共存」を目指す
- 課題は、川下側(消費者側)への普及が限定的だったこと

【第2期 普及期(2010年～2017年)の特徴と課題】

- 2010年東京おもちゃ美術館が木育に乗り出す。木育キャラバンの開催、赤ちゃん木育ひろばの開設、ウッドスタートの推進、姉妹おもちゃ美術館の開館などを実施。川下側からのアプローチによって、一般の消費者が、木製品や木質空間とふれ合う機会が飛躍的に増加した。
- 2015年木育・森育楽会の木育がスタート。林業関係者の他、デザイナーなども含めた活動となり、多様な個人、組織、団体が木育の活動に携わるようになる。
- さらに多くの人びとに「木育」を伝えるためにはどうしたらいいのかという課題が生まれる。

【第3期 発展期(2018年～)のテーマと課題】

- テーマは「木育を国民運動に」
- 木は「高い・複雑・面倒」という考えが主流だが、木が価値あるものという考えにする3つの要素。
 - ①木育の現代的意義再考(木育サミットの継続開催)
 - ②都市と森をつなぐ(国産材おもちゃに森や作り手の動画付録を開始、新宿御苑での木のおもちゃイベント開催)
 - ③生涯木育(高齢者向け自然体験プログラムの実施)
- 木育を広めるため、森のことを考えていくためにはLogic(正しさ) & Emotion(感情)が必要。木を使うこと森を守ることを知識として伝える一方で、心を動かす楽しさやデザインを取り入れる。



◆ 基調講演：「木を使うことと木育」 沖 修司(林野庁長官)

多様な樹種が生んだ家具・道具

- 日本は北海道から沖縄まで南北3,000kmと長く、高低差も海岸から高山まで3,000m以上あり、亜寒帯林、冷温帯林、暖温帯林、亜熱帯林と多様な植生が形成されている。
- 日本は多くの島を持ち南北に長い地形、モンスーン地帯にあること等から豊かな生物相を持ち、日本の植物種は、面積がほぼ同じドイツの2,700種に対して5,600種にも及ぶ。
- 地域地域でいろいろな木があり、産業としても利用してきた。例えば、浄法寺塗(岩手)、樺細工(秋田)、加茂桐箆笥(新潟)、大館曲げわっぱ(秋田)、箱根寄木細工(神奈川)、京指物(京都)など。日本の文化になじむような形で木の道具を作ってきた。

日本人と森林とのつき合い

- 鎖国していた江戸時代の燃料は木だけだったため、江戸時代に描かれた絵画には、ハゲ山、点在するマツの木などが多く見られる。明治中期以降に始められた治山事業などにより緑が蘇ったが、戦中戦後の伐採で森林は再び荒廃した。
- 植林が始まり、S40年頃には緑が戻りはじめ、現在では緑が戻りようやく使える木が出来てきた。これからは切って使って植える時代。

森林を利用することで循環する

～これからの森林サイクル～

- 重要なことは、大きくなった木を適材適所に使いながら、もう一回植えて育てるというサイクルを作ること。
- 持続的な森林の経営管理をすることに加えてウッドバリューチェーンをしていかないと、山にお金が戻っていかない。山にお金が戻らないということは木を植えないということ。それは50年後には木がないということ。
- 国産材を使って回していこうとしている皆さんというのは運命共同体。この産業に携わっている人たちは50年後に対して責任を持った仕事をしようというのが今の大きな課題。
- 都市で木を使うことも進めたい。今までは間伐材から集成材を作っていたが、成熟した木が出来たことで無垢材という大きな塊で使える木が出てきた。それを住宅だけ

でなく非住宅にも使っていくということが、これからの大きな課題。

「木育(もくいく)」

- 今は木造の住宅に住んでいない子どもが多い。子どもの時代から木というものに触れあっていくことで、木は同じ生き物、生物素材であるということ、あたたかい、精神的な落ち着きも得られるという利用の意義を学んで伝えていく、という原点に立って木育をすすめたい。
- 日本各地には種類のいろいろな木があること、それぞれの地でそれぞれの木を活かしていくことも盛り込みたい。

「森林環境譲与税の活用」

- H31年度から森林環境譲与税が実施される。市町村に譲与税の形で、スタートの年は200億、どんどん上がっていきH45年には600億となる予定。大きな目的は、森林の整備およびその促進に関する費用となっている。
- このお金は都市部にも行く。東京23区、横浜、名古屋、大阪、福岡。木材の利用をお願いしたい。
- 新宿区はウッドスタートで使う木を姉妹都市の市町村から買うという関係を作っている。そうすると、23区内に落ちたお金がもう一回山側に落ちる。そういった循環が作れる。
- 市町村の方は、ぜひ自分たちの森から作った木製品を姉妹都市と連携して提供し、山地にお金が戻ってくるサイクルを作ってほしい。



◆ 特別講演：「いのちに寄り添う “まほろば秩父” の森が育むもの」

園田 稔(秩父神社宮司)

環境問題への取り組み

- H14年に社叢(しゃそう)学会を結成した。日本の独特の風景の中に森があり鳥居がある。なぜ鳥居があるのだろうかというところから、日本の文化のつながりというものを思い立ち結成した。H17年、愛知万博が開催され、自然の英知というテーマで初めて環境問題を掲げた。日本は森の国。一般には軽視され荒れているが、日本にはすばらしい森の文化があるということを押すめたいということで、「もりをつくるはなし」という映像を展覧した。
- 戦後は日本全国の山が荒れ果て、スギやヒノキの植林に励んだ。現在は森の世話ができていない。花粉症の原因にもなってしまった。最近はスギやヒノキを切って使い、代わりに広葉樹を植えて変換しようとしている。
- 日本にはたくさんの宗教関係者がいて大変な数の宗教教団があるが、宗教界も環境問題に取り組んでいて、所沢で「となりのトトロ森づくり」という植林活動もした。

豊かな自然があつてこそその神仏信仰

- 日本は森の豊かなところに縄文の文化が生まれ、稲作の弥生の文化が育ち、やがて王権の時代がきた。一番大事な文化の基礎は稲作。稲作は水と太陽が必要で、水を確保するために先祖たちは大変苦勞をしていた。一番大事な苦心は上流に森を育てるということ。豊かな森を破壊せず、稲作のための適度な灌漑を確保する。日本人が生きるために必要な営みでもあった。上流の森を尊重し、そこに神の存在をという文化が生まれたと考えられる
- 近世から現代にかけての神の意味として、上(かみ)にまつから神だという説がある。天皇を「おかみ」と呼び、中世には將軍に対して「おかみ」という言葉を使い、近世になると大名も含めて「おかみ」と呼んだ。やがて家で一番偉いとされるお母さんが「おかみさん」と呼ばれるようになった
- 京都大学の先生の発表によると、神の本来の意味は「クマ」であり、陰になって見えないところが「クマ」のことで、見通しができないところが「クマ」。奥山にあたる場所、人間の目に触れにくいところが「クマ」。里に住む人が豊かな水をいただくのは、山の奥に鎮まっている精霊、魂であるというのが神の語源。

- 上下(かみしも)というのは本末(もとすえ)の関係だった。垂直の関係になってしまったが、もともとは本末。源が上で、末が下。源流の源が川上、川下は末のこと。日本語の神は里から見る恵の水源、山、森のことで、そこに神が鎮まるというのが日本人の観念
- 日本人のいう神様は姿が見えない、見るができない。日本の多宗教というのは、海外の多宗教というのとは違い、神様の姿を積極的に絵にしたり形にしたりしない。それは見えない魂として宿するという形
- 大陸から渡ってきた頃の仏教の仏は、本来人間が修行して悟った姿。人間の到達点として、目に見えるところにいた。平安時代以降は日本化していき非物化され、特にご本尊は目に触れない形になって、ご本尊にかわるものにお参りするのが日本仏教の形になった
- 豊かなところに神仏は共存する。豊かな自然があつてこそその神仏信仰。豊かな自然の中にお宮と寺院が共存している。何よりも大事なことは、日本は古来より森に生きてきたということ。森に生きてきたという伝統をそのまま受け次いで現代に至っている。それはこれからの環境問題にとって大きなメッセージになるのではないか
- 地球が命を育んだのは植物から始まっている。現在も森林を通して、あるいは木を通して動物が命をつなぎ人間も命をつないでいる。そういうことを考えると、樹木というのは単に人間が使うというだけではなく、地球の生命体としての重要なもの。
- われわれは植物を単に道具として使用するとだけでなく、そこに命があるということを見えないけれども命だということを考えなくてはならない。それを神として祀ってきた森の文化、森の宗教がある。森に対する畏敬の念、森の大切さ、木の大切さをもう一度我々の心に取り戻すことが必要だ。



分科会1 森と都市をつなぐ ～人と森のつながりの「見える化」～

安心できる飲料水の提供、二酸化炭素の吸収、癒やしやレクリエーションの場の提供などなど、いろんな形で都市住民の暮らしを支えている森。しかしそのつながりは見えにくく、森から得られる恩恵はいつも忘れがちである。そこで本分科会では、そのつながりを「見える化」して、遠く離れたところにある森に対して、都市住民はどのように関わっていくべきなのか、それをつなぐためにはどうしたらいいのか。その具体的なアイデアに迫っていった。

1: 各パネリストからの報告

青木 亮輔(株式会社東京チェンソーズ)

森林率93%という東京・檜原村を拠点に、戦後の植林木が樹齢100年を迎え始める2050年の社会を見すえた林業事業体「東京チェンソーズ」を設立。都民の多くが環境資源としての機能を森林に期待していることをふまえ、木材に加えレクリエーション資源として森林の価値を存分に引き出すために、子どもから大人まで多様な木育の取り組みを行っている。木育は自然共生社会への入り口であり、1370万人の都民運動への足がかりと考えている。

山田 健(サントリーホールディングス株式会社)

良質な天然水は会社の生命線。その持続可能性を守るために、「天然水の森」と名づけた水源林保全活動を、社の基幹事業として全国20箇所・9000ヘクタールの森に展開してきた。各地の森は、手入れ不足、シカの採食圧、照葉樹林化などで危機的状況にあり、これはやがて都会の危機へとつながっていく。水や森に生かされている企業や都市住民が、森の整備を推進し、山の産物を使い、山の暮らしが成り立つ仕組みづくりが求められる。

久喜 邦康(秩父市長)

秩父市は近隣自治体と共に「定住自立圏」を掲げ、森林・林業の活性化に取り組んでいる。木育については、いつでも、どこでも、だれでも、様々なライフステージで森林・林業について学び、触れる「生涯木育」をめざしている。一條ランバー株式会社や東京都豊島区など企業・自治体との連携や、伝統的な絹織物「秩父銘仙」とコラボした誕生祝い品の製作を通じて、連携の輪をいかにして広げていくかが、木育の発展のカギとなる手応えを感じている。

2: 全体の討論のまとめ

パネリストの取り組みに対するステークホルダーからの評価や手応えとして、①地域産材の主な用途である住宅建材は一般の人には敷居が高いが、木育はハードルを下げる効果がある(青木) ②昨今は消費者が企業側の想いやストーリーに反応し、エコ商品を選ぶようになってきている(山田) ③多岐にわたる林業施策と木育とが相乗効果を発揮して、川下にいる企業や自治体にとっての魅力を高めている(久喜)ことなどが明らかになった。

一方、たとえば東京では林業従事者が現在200人ほどに減っていることや、地元で森林科学科を有する高校がありながら卒業生が必ずしも林業に就かないなど、人手不足や技術継承という山側が直面する課題があった。これに対しては、森づくりを支える人づくりが重要であること、森の資源を活かす上で重要な道は公共性の高いインフラであり、整備に都市側も積極的に関与すべきであることが提起された。

会場からは、担い手育成のための工夫や、子どもたちへの効果的なアプローチに関する問いかけがあり、若い世代の力を引き出すための現場重視の研修プログラムや組織改革、木育に取り組む自らが「モデル」になること、都会に暮らす人が美術館や映画館に行くのと同じように森に行くという選択がされるような「場」を整えていくことなど、多くのヒントが得られた。森と都市をつなぐために、1人ひとりの力と、社会の力をお互いに高めていく必要があると言えるだろう。

報告者: 茅野 恒秀(信州大学)



分科会2 乳幼児期を彩る木育おもちゃ ～埼玉からの発信～

本分科会は2部構成で行われた。第1部は、ご自身でおもちゃのデザイン・製作を手掛ける3名の作り手の方々に登場いただき、どのような想いのもとに製作しているかについてお話いただいた。また参加者にも実際におもちゃに触れて頂き、遊ぶことを通じて、彼らの想いに触れる機会も作った。後半は当協会が行っているウッドスタート事業について、作り手の皆様との関わりと事業を進める魅力と難しさについてお話頂いた。

1: 各パネリストからの報告

江幡 三香(スタジオ鼎)

「ときがわ木つき」のピースを持ち、香りや肌触りを確かめた上で、木の幹に見立てた台に置いた人から自己紹介を行う。江幡さんが長年続けられたアート活動と、地域材である「西川材」との出会いによって、おもちゃ作りが本格的になった。江幡さんのアートとモノ作りの精神が、西川材に新たな光を当てる。

香田 佳子(アトリエ倭)

香田さんは、日本の伝統的な大工や建具の技術をおもちゃに取り入れている。伝統的な紋様がデザインされた独楽「はっば」では、回る前の模様をしっかりと見て、この模様が回ったらどのように見えるかをイメージしてもらう事が大切。組み木の技法を再現したサイコロパズル「きぐみ」は、あえてバラバラにして参加者に渡し、参加者自身が自分の持つピースと合致する相手を探すゲームを行った。おもちゃで遊ぶ事を通じて、先人達の知恵と技術を感じ、過去・現在・未来と日本の伝統が続いていることを感じてもらいたい。

小松 和人(おもちゃのこま一む)

木の素材を活かしながら、様々な素材を掛け合わせて製造しているおもちゃのこま一む。小松さんが大切にしている事は「遊び」そのもの。実際におもちゃを触った人が、どのような遊びを見つけ、広げていくことができるかを大切にしている。参加者は「ブリ木口ボ」「こまむどおる」「Tapnet」「どんぐりころころ」を自由に動かし、遊びを見つけていった。

2: 全体の討論のまとめ

第2部はウッドスタート事業と作り手の関わりについてお話いただいた。普段の活動と違う事は、おもちゃ作りのアプローチ。実際に地域に出向き、その文化・歴史・気候・風土から感じた事から、おもちゃを考えるという体験は、刺激的でおもしろいという感想がある一方、おもちゃ作りの経験が無い職人の皆様にむけて、おもちゃ作りのアドバイスをしていく事が難しいという意見も出た。同じ木を扱う仕事だが、作業工程や仕上げに至るまで異なる文化がある事を改めて感じた。

国産材を活用したおもちゃ作りを定着させていくには、様々な「つながり」が必要である。国産材を用いたおもちゃは、身近な自然に思いを馳せ、親の愛情を子どもに伝える媒体となり、家族をつなぐ。そのおもちゃがどのように作られたかを知る事は、地域や社会とのつながりを意識する事にもなる。こうした様々なつながりの連続によって、木のおもちゃ文化が根付くと感じた分科会であった。

報告者: 岡田 哲也(認定NPO法人 芸術と遊び創造協会)



分科会3 木の良さを伝える 木に関わる仕事をする ～木で育て～

この分科会では義務教育段階、高等教育段階、専門教育段階における木材教育、木育の事例をとりあげ、学校教育を中心とした木育の現状認識とこれからのあり方について議論を進めた。

1：各パネリストからの報告

中村 正宏(埼玉県川島町)
 全国初の学校木育推進宣言の経緯を中心に川島町における木育の事例が報告された。とくに義務教育段階において木や森と触れる機会が少ないこと、川に囲まれ、平地しかない子ども達だからこそ、木や森を学ぶ機会が大切であること、そして自然の恵みを体験することの重要性など、川島町の木育の契機、学校側の思いなどが紹介された。

赤松 明(ものづくり大学)
 ものづくり大学における木材教育の現状、そして学生の取り組みについて報告がなされた。木材や木材製品を提示しながら、木材の性質や加工技術の基本的な原理を解説しつつ、そのすばらしさとそれを伝えていくための苦心や工夫、次世代を支える技術者を養成への展望が語られた。また、国際技能五輪など高度技術者の養成に向けた取り組みの一端についても紹介された。

小山 真子(東京都産業労働局)
 ご自身が統括する職業能力開発センター木工部門の現状について説明があった。木材加工技術者養成のために計画されたカリキュラムとその具体的内容が紹介されるとともに、木材や木の製品に関わる学び直しを求めて入所する様々な経歴を持った受講生の状況、そして技術指導のあり方、コース修了後の進路など、職業訓練機関としての様々な問題とその解決に向けた思いが丁寧に報告された。

2：全体の討論のまとめ

木育は、木材の持つ効能や学習材料としての諸性質を活かして、ひとつづくりに活かす取り組みである。この取り組みは、幼児期から青年期はもちろん、あらゆる年代に行っていく必要がある。しかしながら、本分科会でも明らかになったように、現在学校教育で市民が共通して木材、森林に触れる機会は、小学校社会科、図画工作科、中学校技術・家庭科であり、専門教育についても、いまや林業、木材を冠する高等学校、大学はほとんどない。時代の変遷とともに時間数や系統性は確実に失われつつある。

この分科会では、こうした我が国の状況を「偶然性に期待する教育」と捉えることとした。すなわち、日本人の人生において、木材、森林、林業、木育などの教育に接するかどうかは、個人あるいはその保護者のライフスタイルや嗜好性に依存するものであり、持続的な木材利用、森林を支える次世代の育成は、出会えるかどうかという、いわば偶然性が支配する教育によってかろうじて支えられているといえる。なんと心許ないことか。

全体の討論を通して、私たちは木材、森林に関わる技術、伝統、文化の継承に向けて、学ぶべきものとしての森林、木材について捉え直し、学校教育における木育の目的、内容、方法について議論を深める必要があることを確認した。また、学校教育を補うものとして生涯学習、社会教育としての木育を推進し、いつでも木材の大切さ、すばらしさを学び直す機会を提供し続ける必要があることについて、再認識した。

報告者：浅田 茂裕(埼玉大学)



分科会4 人生最後のステージを木とともに ～高齢者と木育～

超高齢社会の日本において、木育は子どもだけに向けたものではなく、高齢者と木の関係にも注目したい。高齢者施設における木質化の意味、認知症のお年寄りにとっての森林体験の重要性、高齢者が使うものを地域材で開発する意義など、研究実践している三人の方々に語っていただいた。

1：各パネリストからの報告

櫻川 智史(静岡県工業技術研究所)
 「年老いた人にとって、木質環境は本当に優しいといえるのか？」をテーマに、特養における木造化の特性を、RCとの比較データを示しながら考察してもらった。結論として木質化は、意匠性、温熱環境、芳香成分等で優位性を示したが、日中の照度不足等留意する点も明らかとなった。光環境に関しては高窓や照明増など改善策を講じることにより、全体として木質化の良さが認識できた。

田口 真嗣(株式会社オンウィップス)
 「人生最後のステージを木とともに」で、高齢者の生きる力を呼び覚ます「森育」実践報告があった。施設では「すり足」で過ごしていた認知症のお年寄りを森へ誘い、ポールウォーキングで脳を刺激し、歩いた後に幼児との交流体験も。過去の原風景や幼児と触れあい、心も体も生き生きと反応を示すさまを確認できた。

金子 真治(金子製材株式会社)
 「ウッドスタートがあるなら、ウッドエンドも」と、日本の使われていない木を、何とか新しい技術によって需要喚起できないかとの思いを語ってもらった。秩父であまり使われない樹種や木材の部位に着目し、「棺」を作ってみることに。自分と同時期に成育してきた故郷の木に包まれて送られたい、と想う人は少なくないのではというお話をいただいた。

2：全体の討論のまとめ

<櫻川さん>：木造施設では湿度が高くなり過ぎず安定するので、変動の大きいRCに比べ熱中症リスクが減少するという利点がある。<田口さん>：初めは心配していた高齢者の「森育」に、我ながら目を見張る思い。生きる力につながる「五感を刺激」することが、この森歩きには備わっている。<金子さん>：接着剤を使う集成材ではなく、秩父の木棺は無垢材で構成されており、近くの木を使うことができる環境に優しい製品といえる。

【会場から】：「木育を説明する際のPRポイントは？」の質問に、櫻川さん：建築内装材として木材は、ちょうど具合がいい性能、つまり消極的な快適性を有し、穏やかな視覚や触覚、嗅覚刺激などと併せ「ストレス抑制効果」を持つ、いわば「人に優しい天然材料」といえるのでは。<田口さん>室内で幼児に積み木で「木」を表わしてもらおうと、平面に木の形をつくる。その子たちを森に連れて行き、この積み木はここにある木が切られて出来ているんだよと言うと、そのあとの積み木でつくる木は立体的になる。「WOOD」と「TREE」の違いを感じてもらおうのが「木育」だと思う。<金子さん>地産地消(ウッドマイル)はじめ、国産(地域)の「木を使うこと」は環境負荷が少なく、また、流域材の利用は自然災害防止にもつながる。「環境に良い木育」を推進し環境負荷が少ない資源を使うことで、都市部の人たちの生活をも変えていく可能性があると思う。

【座長より】：分科会参加者から多岐にわたる質問が投げかけられ、関心の高さに驚かされた。私の答えた「木育を語る際のPRポイント」は、「現代社会の効率化や短期成果ばかり求めるあり方の、ちょうど対角線にある価値が「木育」ではないだろうか。二世帯、三世帯もの長い時間軸で木を育て活用することは、「今さえ快適で便利であればいい」へのアンチテーゼともいえるのではと。三人のパネリストの研究実践も、そんなゆったりとした時間感覚と無縁ではないと思う。

報告者：鏡 勉(社会福祉法人 信愛報恩会)



来賓紹介・ウッドスタート自治体&企業ランチョンサミット

ウッドスタート宣言自治体は現在35市町村、1県。企業は23団体と広がりを見せている中、自治体及び企業の代表者が一堂に会し、それぞれの地域の木育の取組について、発信、交流。木育の取組をさらに次のステージへと進める機会となった。



コーディネーター：椎川忍(一般財団法人地域活性化センター理事長)、多田千尋(東京おもちゃ美術館館長)、馬場清(東京おもちゃ美術館副館長)、青野裕介(株式会社Tree to Green代表取締役)

分科会①：自治体の部	分科会②：企業の部
<p><宣言自治体></p> <ul style="list-style-type: none"> ●黒澤 八郎(群馬県上野村 村長) ●石橋 良治(島根県邑南町 町長) ●宇佐美 晃三(岐阜県大野町 町長) ●河野 忠康(愛媛県久万高原町 町長) ●宮田 秀利(福島県塙町 町長) ●管家 一夫(愛媛県西予市 市長) ●久喜 邦康(埼玉県秩父市 市長) <p><アドバイザー(木育推進委員)></p> <ul style="list-style-type: none"> ●磯村 洋之(富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合) ●鈴木 智恵子(株式会社フォレストバンク) ●松井 勲尚(岐阜県立森林文化アカデミー) ●山下 晃功(島根大学) ●沖 修司(林野庁 長官) 	<p><宣言企業></p> <ul style="list-style-type: none"> ●長谷川 泰治(株式会社長谷萬) ●岩村 隆生(株式会社長谷萬) ●山川 紀子(株式会社GRiP'S) ●一條 達雄(一條ランバー株式会社) ●佐藤 樹雄(一條ランバー株式会社) ●野村 忠司(まちのちから合同会社) ●海瀬 隆太郎(ネットヨタ和歌山株式会社) ●小川 晃(細田木材工業株式会社) ●吉田 道生(細田木材工業株式会社) ●橋本 康次(イオンスタイル東戸塚) <p><アドバイザー(木育推進委員)></p> <ul style="list-style-type: none"> ●大谷 忠(東京学芸大学) ●水谷 伸吉(一般社団法人モア・トゥリーズ) ●持田 末広(秩父市 副市長) ●岡田 育大(株式会社ゲンボク)

クロージングセレモニー

クロージングセレモニーでは、イベントの総括を行うとともに、左記ページのランチョンサミットにて交わされた意見の発表を行い、今後の木育の展望と可能性について模索した。



椎川忍(地域活性化センター理事長)

- ランチョンサミット自治体版報告：ウッドスタート宣言自治体の首長が一堂に会し、「木育第2ステージへ」をテーマに様々な木育の取組について意見交換を行った。木育の効果は、日本人は森で暮らしてきた歴史の中で体感としてあるのではないかと。森林・林業の大切さや木育の重要性というものを理解してもらうのは難しい。子どもの木育を通して、大人にも森林・林業の大切さを伝えている。遠隔地自治間での連携も進めたいがなかなか難しい。これが今後の課題。
- 木育の展望：良いことが必ず人に伝わるわけではない。どうやって広げるかということを考えなくてはならない。ひとつは広報戦略、マスコミの活用。もうひとつはクチコミ。その両方をやっていく。

水谷 伸吉(more trees事務局長)

- ランチョンサミット企業版報告：「日本の森を元気にするために何ができるのか」。それぞれの企業の強みを生かした、国産材の活用方法について情報交換をした。代表的な取り組みは、自社の企業活動になぞらえて木質化を進めていく、スペースを設けるといった活動。ウッドスタートは外向きと内向きを両方強化していくことで、社員に対しても周知徹底ができ、一般の方にも木育を通して企業の姿勢や取組みが伝わっていくと思う。
- 木育の展望：ウッドスタートでおもちゃが新生児にプレゼントされてから、ウッドエンドで墓場に行く棺まで国産材の木に囲まれていくというのが究極の生涯学習。そういう思いが次世代にバトンタッチされていくことが木育なのかなと思う。

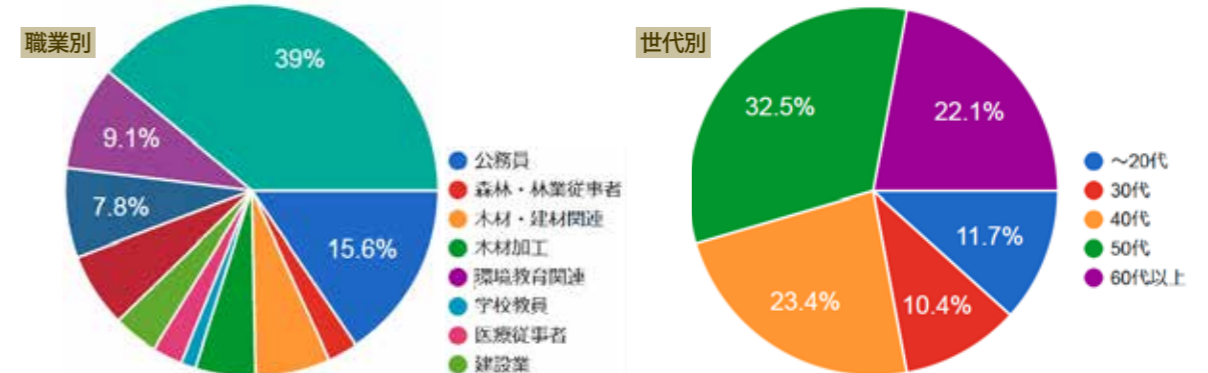
一條 達雄(一條ランバー株式会社代表取締役)

- ランチョンサミット企業版報告：弊社では木と暮らしのふれあい展を10月に実施している他、御苑のイベントやおもちゃ祭りにも参加。秩父市で木育キャラバンも実施し、木造の家をつくる建築士の卵の方々をお願いして作った木造の電車を展示した。我々だけとか、一つの街、市だけでは木育は広がっていかない。いろいろな人を巻き込んでいきたい。
- 木育の展望：木育をやると必ず外部へのPRになるが、社内に対しての理解を深めていってほしいと思っている。接することによって芽が開く。一人二人の突発的な意見より、みんなで練ってやっていくということが大切。

参加者の「声」

- 木育というと森林地域でできることだというイメージが強かったのですが、姉妹都市連携などのお話をうかがい、森林地域と都市が繋がれば全国どこでも可能なことだと分かりました。木に囲まれる生活、素敵だと思います。乳幼児期から人生の終わりまでの生活がより豊かな物になり、町起こしや地域の雇用を生み出すことも考えるとますます広がっていくといいなと思いました。
- 木育が様々な現代の課題を解決するツールになると共に、それが木育の推進に繋がると、感じました。脇役なのに影の主役のように感じました。
- まずは、参加人数に驚きました。午前の部では、沖長官や園田宮司の講演により、国の状況や山から海への繋がり等、多方面からの現状を知ることができました。午後の分科会①では、行政、林業家、企業等、人が繋がる事により、森と都市がよりよくなるように思えました。貴重な情報が多数あり、このような催しに参加できました事をうれしく思います。
- 現代社会の中の樹木の循環について考えていた時に、木育サミットのことを知り初めて参加しました。木のこと、水のこと、子どものこと、環境のこと、真剣に取り組んでいるカッコイイ大人たちの話は本当に面白かったです。

来場者属性



TOPIC:木育ゼミナール&木育講演会

「木育」を積極的に取り入れる方々をお招きし、地域づくりや地域の課題解決のためにさまざまな方々をお招きし、見解を含める木育ゼミナール。今年度は8月に銀座NAGANO、9月に東京都都民ホールの2カ所にて開催されました。8月は第3回の木育サミットの開催地である長野県塩尻市からのつながりで、長野県内の先進的な木育実践者として塩尻商工会議所より海津健司様、安曇野市林務部 里山再生担当コーディネーターの田村恵子様などをお招きし、長野県内の木育について語りまいました。

また東京都都民ホールでは、日本の造園家であり、ランドスケープデザイナー、コミュニティデザイナーという多彩な顔を持つ株式会社studio-L代表 山崎亮様をお招きし、自身がかつて行った地域振興事業の例や、木育に関しての独自のご意見を約250名の参加者にお話いただきました。さまざまな木育従事者と共に作り上げていく木育ゼミナール。この活動を元により多くの方々とつながりが生まれることを、私たちは願っています。



第1回 銀座NAGANOでの開催の様子

◆ 主催者紹介

🏠 東京おもちゃ美術館

東京おもちゃ美術館は、おもちゃを手にとり、触れて、遊ぶことができる体験型の美術館です。手作りおもちゃを作ることができる「おもちゃ工房」や、季節のイベントなど、子どもだけではなく、大人も赤ちゃんも多世代で楽しめる、さまざまなコンテンツを取り揃えております。また、国産の木材のみで作られた「おもちゃのもり」や、赤ちゃんが木の匂いや触り心地をふんだんに感じられる「赤ちゃん木育ひろば」など、木育にふさわしいコンテンツを多数そろえております。



〒160-0004 東京都新宿区四谷4-20 四谷ひろば内

tel: 03-5367-9601 fax:03-5367-9602

<http://www.goodtoy.org/ttm>